The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	美意識「洒落」の変革期 : 明治・大正・昭和を中心に
Author(s)	橋本, 凜
Citation	日本語・日本文化研究. 2016, 26, p. 192-203
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/59661
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

美意識「洒落」の変革期
―明治・大正・昭和を中心に―

橋本　凜

1.　はじめに

美意識や価値観を「言葉」という媒体を用いて定義することには、しばしば困難が伴う。各々の美意識の境界は各人それぞれが規定するものであり、その指し示す範囲は必ずしも一致しない。それを言葉によって規定せざるを得ない辞書においては、近似値を持つ言葉による言い換えが行われるが、実際にそれがどのような範囲を対象として取るのかという具体的な点については言及しないことが多々ある。そのため、そういった美意識の「輪郭線」は極めて曖昧・かつ抽象的な理解の範疇に留まっていると言える。ただ、同じ文化圏で長い期間生活してきた母語話者であれば、文化的共通項に基づいたニュアンスによる理解が多くの場合可能であり、会話などにおいて致命的な齟齬が表出することもない。一方、日本語学習者の場合はどうであろうか。辞書上の限定されたスペースに記載された意味で十分な理解が可能であるとは思えないが、かといって美意識のような抽象的な概念を彼らに口頭で「翻訳」して伝えることは難しい。それは、美意識の概念的意味の変遷が、断続的に、あるいは連続して起こってきたという歴史的・文化的背景があり、その過程で多種多様な要素がそこに内包されていったという点を考慮に入れて説明を行う必要があるからである。本稿において取り扱う「洒落」という日本特有の美意識も、長い歴史の中で様々な要因からの影響を受け、地口からファッションに至るまで幅広い対象を取る現代のような用法に落ち着いている。『日本国語大辞典（第２版）』においても「(1)当世風でいきなこと。気のきいていること。さっぱりしてものにこだわらないこと。洒脱（しゃだつ）。(2)はなやかによそおうこと。また、はでな服装。いきな身なり。おしゃれ。(3)その場に興を添えるために言う滑稽な文句。ある文句をもじって言う地口（じぐち）。だじゃれ。警句。冗談。(4)たわむれてする事。冗談事。遊び。(5)遊里などでの遊び。また、それになれていること。(6)「しゃれおんな（洒落女）」の略。(7)（得意になれるような）見ばえのよい物事。」という７分類が掲載されており、一口では言い表せないほど多くの要素が「洒落」という語に内包されていることがわかる。ただ、道具としての「辞書」の機能を考えると当然のことではあるが、どの用法がどの時代において付加されたのか、そして主流の用法はどれであったのかという点に関しては一切言及されていない。しかし、当然各々の意味用法がすべての時代において同頻度で用いられていたとは考えられず、時代によってそれぞれ盛衰があったと考えるのが妥当である。

では、各々の時代における「洒落」の用法はどのように変遷を遂げてきたのであろうか。このような点は、管見の限り各先行研究においても言及されていない。そのため、日本特

有の美意識「洒落」の用法の形成や変遷を文化的背景から再考することは、現代に息づく「洒落」という美意識がどのように形成されたか、または変遷を遂げてきたかという１つのモデルケースを概観するという意味で意義深く、また、ひいては上述したような美意識の「輪郭線」を捉えるための一助となると考える。そこで、本稿においては、「洒落」の用法の変革期であると考えられる 1920 年代中期から 1930 年代を中心に、具体的な用例を参照しながらその変化の要因となる文化的背景を探った。

2.研究の方法

2.1.データ採取の方法

本稿においては、用例を採取するにあたって『読売新聞』のオンラインコーパスである「ヨミダス歴史館」（以下ヨミダス）を採用した。そして、紙面に見られる「洒落」という言葉を「対象」という観点から５つに分類（後述）して各々の用例数の増減を観察することにより、各時代の主流の用法はどれであったか、そして主流の用法が変化する転機となったのはいつであったかということについて考察を加えた。具体的には、1874 年から 1989 年にわたる明治・大正・昭和間の新聞に検索範囲を絞って「洒落」というキーワードを入力し、全文検索を行って得られた用例を対象に据えて考察を行った。

ひらがなの「しゃれ」、カタカナの「シャレ」など複数の表記がある中、漢字表記の「洒落」を検索ワードとして採用した理由は、「洒落」の和語的な読みである「しゃれ」、及び漢語的な読みである「しゃらく」という 2 つのパターンを考察対象として包括するためである。本稿においては、それらの使い分けには何らかの基準が存在するのか、またどの時期から「しゃらく」の読みが見られなくなったのかという２点に関しても考察を試みた。

なお、検索時にキーワード検索ではなく全文検索を用いたのは、実際には「洒落」を含む語が記事中で使われていない場合であっても、コーパス作成者が「お洒落」や「洒落」などの語を恣意的にタグ付けしているケースがあることを考慮に入れたためである。ただ、全文検索においても実際の記事とは異なる表現のデータが登録されている場合や、２つの異なる記事であるにもかかわらず 1 つの記事としてまとめられている場合が存在したことを付け加えておく。そのため、全ての用例を紙面から手作業で確認し、実際には洒落という言葉が用いられていない場合は除外・２つの用例が１つとしてカウントされている場合は２つに分割するという操作を行った。当初検索して得られた用例は 469 例であったが、その操作の結果、有効な分析対象となる用例数は 464 例となった。

また、ヨミダスにおける明治・大正・昭和の記事は全文がデジタルデータ化されておらず、それらの時期の記事において検索対象となるのは見出しに「洒落」という語が用いられているもののみである。ただ、記事本文にあらわれた用例すべてを網羅することは不可能であっても、それを見出しとするものはその記事自体が「洒落」を主要テーマとする可能性が高いと考えられるため、この手法を取るに至った。

2.2.コーパス選択の妥当性

まず、『読売新聞』のコーパスから用例を採取した最大の理由は、元々『読売新聞』が庶民を対象にした、「市井の事件を平易な文章で書いた」小新聞だという点にある(興津,1983)。すなわち、当該コーパスを用いることによって、一部の知識人層に限らない、一般の人々が身近に触れていた言葉を用例として採取することが可能であると考えた。各新聞社がそれぞれの特色を前面に押し出す中で、『読売新聞』が自社の新聞の特徴として「分かりやすさ」を標榜したということは、1874 年 11 月 2 日の創刊号に掲載された「此新ぶん紙は女童のおしへにとて為になる事柄を誰にでも分るやうに書てだす旨趣でござります（後略）」（筆者注：以下、引用部分のルビは基本的に省略する）という表現からも伺える。現にその文章の平易さは、後に福沢諭吉が「障子越しに下女が聞いてわかる」と評したほどだった（出久根,2003）。また、創刊半年後には「東京の新聞のなかでも最高の発行部数」(興津,1983)を誇り、他社の新聞と比較しても『読売新聞』の庶民への浸透率は相当に大きな割合を占めていたと考えられる。このような理由から、明治期以降、日常生活の中で「洒落」がどのように用いられていたかを考察する上で、ヨミダスを用例の採取元として選択するのが妥当であるという考えに至った。

2.3.分類の基準と分析結果

本稿においては、上述した考察対象となる 464 件の用例を「洒落の対象」という観点から 5 つに分類し、各々の増減を観察した。具体的には、

①服や鞄など、具体的な事物を対象にとるもの
②地口など、言葉に関する事柄を対象にとるもの
③人間性や立ち居振る舞いを対象にとるもの
④「洒落本」という固有名詞の一部であるもの
⑤投書のペンネーム・演劇のタイトル等、意図が明確でなく対象が特定できないもの

という 5 分類を作成して用いた。補足しておくと、「お洒落」という言葉が使われる場合は基本的に①に分類される。また、④の「固有名詞の一部」という分類は、厳密に言えば「対象」という区分ではない。ただ、この類に属する用例が一定数存在していることは事実であり、「洒落」の全体像をより鮮明にするために今回はこれを分類として採用した。

今回、「意味」という観点から分類を行わなかったのは、そもそも「用例がどの意味で用いられているか」という判断を下す際に主観性が加わることが不可避であり、そういった点から見ると、意味からの分類は完全に客観的なデータであると言い切ることはできないと考えたためである。また、上述した通り、美意識について意味観点からの分類を行う際には、近似値であると考えられる語を説明に用いることが一般的であり、結局は明確な分類に至らない場合が多い。例えば、「洒落」の説明としてしばしば引き合いに出されるのは、「洗練」「いき」などの語であるが、それらと「洒落」がどのような点で区分されるのか、

またどのような点で類似しているのかという部分については極めて曖昧である。反面、「対象」という観点からの分類の基準は明確であり、一旦客観的にデータを整理し、「洒落」の全体像を俯瞰するための操作として適切であると考えた。

それでは、実際の分類結果を参照していく。表１は、各分類の用例数の増減を 10 年１区分として追ったものである。なお、「しゃらく」と明確にルビが振ってあるものは、それぞれ 1890 年代に 4 例、1900 年代に 3 例、1910 年代に 2 例見られた。

表１：10 年ごとに見た各分類における用例数の推移

	①	②	③	④	⑤	合計
1870年代	0	1	0	1	0	2
1880年代	0	9	4	0	4	17
1890年代	0	18	3	6	0	27
1900年代	0	14	33	0	4	51
1910年代	2	9	3	5	0	19
1920年代	17	10	3	2	0	32
1930年代	219	18	6	3	6	252
1940年代	9	3	0	0	2	14
1950年代	4	4	1	1	0	10
1960年代	12	2	2	0	0	16
1970年代	3	0	3	8	0	14
1980年代	4	0	1	2	3	10
合計	270	88	59	28	19	464

まず、この表を一見して目を引かれるのは、①に分類される用例数が 1930 年代に急激な増加を見せているという点である。この増加のひとつの要因として挙げられるのは、その時期に「お洒落読本」「モダーンお洒落読本」といった、「お洒落」と名のつく連載が開始したということである。特に、「お洒落問答」という名を冠した、読者から寄せられた疑問に対して有識者が答えるという内容の連載に関しては、1930 年代において①に分類された用例 219 例中、実にその約半分となる 107 例を占めている。ただ、それらの重複する連載のタイトルをそれぞれ 1 として数えてみても、1930 年代における①の用例数は 73 となり、それでもやはり 1910 年代までとは比較にならないほど用例数が増加していることが分かる。

これらのことを鑑みると、1920 年代後半～1930 年代が「洒落」の用法におけるひとつの転機となった可能性が非常に高い。そこで、本稿においてはその時期を「洒落の変革期」として論の中心に据え、その変化の様相を探っていくこととする。まず、次項においては前近代的な「洒落」の様相に関して先行研究を参照しながら概観した後、読み仮名としての「しゃれ」「しゃらく」が混淆していた時期に関して考察を加えていく。

3.「しゃれ」と「しゃらく」の混淆期

3.1.「洒落」の系譜

上述した通り、「しゃれ」と「しゃらく」に関する実際のデータを参照していくにあたって、まずはその前提となる先行研究について概観していきたい。

そもそも、「しゃれ」という言葉の語源は何であったかという点については、『語源辞典形容詞編』（吉田編,2000）に記載されているように、「戯れ」「晒れ」が転じたものと言われ

ており、それが漢語「洒落（しゃらく）」と結びついたという内容が通説としてしばしば語られる。付け加えておくと、漢語「洒落」は、『大漢語林』によると「㋐さらっと早く落ちる。㋑心がさっぱりしてこだわりがない」という意味である。

また、漢語「洒落」を日本に持ち込んだのは、一説によると安土桃山から江戸期にかけて日本儒学の祖としてその名を馳せた藤原惺窩であると言われている。実際に、惺窩は既存の朱子学の思想に独自の再解釈を加え、「洒落自得」という概念を提唱していた（金谷,1975）。また、惺窩は、「中国は宋の時代にようやくその姿を見せ始めた洒落（しゃらく）の伝統」を「この日本の地に移植し、自らその典型と化したのである」（茂木,2013）。そして、遊里での出来事を描いた戯作文学が「洒落本」と称されることからもわかるように、「洒落」は次第に遊郭と密接な美意識として認識されるようになっていった。また、「おしゃれ」「しゃれ」という言葉の最初の流行期が宝暦年間からの 7、80 年間であり、遊里での遊びの際、見た目の良さに加えて気の利いた言葉遊びができることが良しとされたこと、さらに「しゃれ」が気前の良さなどの人間的な美点を表す評価語に分化を遂げていったことが先行研究において指摘されている（斎藤,1989）。儒学の世界で用いられていた言葉がなぜ遊里における美意識に転化したのかということについては、「洒落」という価値観が遊郭で好まれる性質を内包していたことに加え、洒落本の多くが「漢学者や漢学者くずれの書生たち」（水野,1976）によって執筆されたものであることと関係があるものと思われるが、本稿の論旨とは異なるためここでは深く言及しない。

ともあれ、「洒落」は遊里と密接に結びついた美意識であり、それは同時に男性と遊女の享楽的世界における美意識であることをも指し示していた。言い換えれば、当時の「地女」と呼ばれる一般の女性たちは、本質的な意味での「洒落」の世界から一線を引いた存在であったとも言える。それは、地女を「美の基準」とする意識が極めて希薄である一方で、遊女の美の絶対性に関する表現が様々な文学作品に散見されることからもわかる（檜谷,1965）。また、檜谷の同論文においては「西鶴の描いた風俗の流行は当代の女（元禄期の）が、容色の範を遊女に求めていたことを明らかにする」ことについても言及されており、当時の遊女が一種のファッションリーダーのような存在であったという様相が窺える。加えて、一般の女性が軽口を叩くことを「はしたない」とする江戸期の女性観と併せて考えると、江戸期の「洒落」の世界における地女の立場は極めて弱いものであったと言える。

3.2.明治期における「しゃれ」と「しゃらく」の混淆

それでは、上述したような洒落の世界の構造は「明治」という新しい時代に入ったことにより、何か変容を遂げたのだろうか。まず、表 1 を参照すると、1910 年代までは②と③の用法、すなわち地口や立ち居振る舞いを対象にとる用法が主流であったことが分かる。また、「洒落」という漢字に「しゃらく」とルビが振られたものは同じく 1910 年代までの記事にのみ散見されたが、それが用例全体 464 例中わずか 9 例に留まったことは上述した

通りである。では、「しゃれ」と「しゃらく」という読みは、場合によって明確に使い分けがなされているのであろうか。

まず、9 例の内訳は、上述した通り 1890 年代に 4 例、1900 年代に 3 例、1910 年代に 2 例となっている。ただ、内 1 例はペンネーム「同臭味洒落斎」の一部としてルビが振られていたものであり、恐らく「しゃらくさい」という語呂合わせであると考えられるため考察から除外する。また、残り 8 例については、2 例が言葉を対象に取る②の分類に属するもので、残り 6 例が人間性や立ち居振る舞いを対象に取る③の分類に属する用例であった。

ところで、漢語「洒落（しゃらく）」が和語「しゃれ」と結びついたことによって、現代のように「洒落」という漢字をしゃれと読むようになったという通説があることは上述した通りであるが、③の用法は確かに漢語の持つ原義に近い。ただ、②の分類に属する用例も見られることからも分かるように、この時期は漢語「しゃらく」と和語「しゃれ」の意味や用法が混淆していく過渡期に属する時期であったと考えられる。さらに言えば、1920 年代以降「しゃらく」というルビが見られなくなっていくことを考慮に入れると、その過渡期は最終局面を迎えていたものと思われる。

これらのことを総合して考えると、③に分類されるものは漢語時代の性質、②に分類されるものは「戯れ」をルーツの 1 つとして持つ和語「しゃれ」の性質をそれぞれ色濃く残していた用法である可能性が非常に高い。そして、それらが統合され、ひとつの日本語と化していく様相がこの「しゃらく」と「しゃれ」の用法の混淆から垣間見える。

また、②と③の用法が主流であったということからは、明治期にはまだ江戸時代の「遊郭と密接に関係した美意識」という意識を強く残していた当時の様相が窺える。遊郭での評価は、現実社会の身分というよりも「遊女といかに良好な関係を築くことができるか」という点に比重が置かれており、その目的達成のためには「面白い冗談や機転のきいた言葉を発すること」や、「身なりや動作が洗練されていること」が求められた。すなわち、遊郭で良しとされていること全体を対象として包括する美意識こそが「洒落」であった。

ただ、さらに大正から昭和に時代が移り変わっていくにつれて、やがて「遊郭における」という枕詞は後景化し、そこから分化した意味が主流となる時代が到来する。すなわち、それは一般の女性である「地女」が「洒落」の世界の表舞台へ上がった時期と言い換えることができる。排除されていたはずの地女がどうして洒落の世界のトップスターに躍り出ることができたのか、そしてその背景には何があったのか。その内容に関しては、次項を参照されたい。

4.「洒落」の変革期

明治という時代は西洋文明が急激に流入した時代であり、それまでの伝統的な価値観や文化が変容したり、再編成された日本社会の中で新たな位置付けを見出したりすることを余儀なくされた時代でもあった。「洒落」という価値観とてその例外ではなく、その変動の

渦中において、代表的な用法が徐々に変容しつつあった。とはいえ、完全に主流となる意味が置き換えられたわけではなく、むしろ「何を対象にとるか」という観点から意味の分化が進み、場面によっての使い分けが明確になりつつあったというのが適切な表現であろう。すなわち、上述したように、前時代的な文化に彩られた「洒落」という概念において遊郭という意識が徐々に後景化し、具体的な事物を対象に取る単なる評価語としての用法が生まれつつあったということである。もちろん具体的な事物を対象とする用法はこれまでにも存在していたが、ここでは遊郭という意識が後景化したこと、つまり「洒落」がより広範な対象を取る美意識となったことを強調したい。別の言い方をすれば、地口や振る舞いなどを含む「遊郭」を基礎においた抽象的・包括的概念の中の、より具体的・表層的な、限定された部分のみにスポットライトが当てられるようになりつつあったということである。また、その変容はもちろん連続的な時間の中で起こったのであり、一概に「この時点が転機であり、そこから変容が起こった」と断言することは難しいが、用例数の増減や各々の内容を考察することによってその大まかな位置を明らかにしたい。まずは、関連する社会的背景を概観し、その後実際の用例について分析を加えることにより考察を行う。

4.1.変革の背景

(1)明治維新以降の女性の地位

上述したように、「洒落」の用法の変化を考察するにあたって、いわゆる「地女」、すなわち一般の女性の社会的地位の変化は非常に重要な要因である。そこで、まず明治以降の女性の社会的地位について一度ここで概観したい。

1868 年以降、不平等条約解消のための欧化政策、いわゆる「文明開化政策」が急速に進められていった。それに伴い、西洋から「天賦人権論」をはじめとする、男女同権や各個人の人権に関わるさまざまな言説や思想が日本に流入した。例えば、福沢諭吉の唱えた、「天は人の上に人を作らず　人の下に人を作らず」という一説はあまりにも有名である。また、1872 年には男女の分け隔てなく学校に通うことを義務付けるような国民皆学方針が定められたり、マリア・ルーズ号事件を契機とする娼妓解放令が出されたりするなど、形式の上では徐々に女性に対する前近代的・差別的な価値観が払拭されようとしているかに見えた。しかし、その内実は諸々の法整備などの形式と必ずしも一致しておらず、依然として旧体制における女性差別的な因習は形を残し続けていた。例えば、人身売買は娼妓解放令によって禁止されたものの、本人の「自由意思」に基づいた売春は政府が容認する形をとっており、「売春の持つ非人間性が問題とされるには時間が必要だった」（脇田他,1995）。とはいうものの、この時代に近代的な人権思想を是とするような意識が散見されることは間違いがなく、その後の自由民権運動の時期における女性の政治的・社会的権利主体としての意識の確立、そして矯風会の活動や青鞜運動などの女性運動に繋がっていった。

また、日清・日露戦争が女性たちに与えた影響も大きく、戦時中の経験から「出征軍人

の妻に職業を」「戦時における婦人の自活の必要」などのスローガンが叫ばれるようになった。そのような歴史的事象を背景に、明治末には女性が様々な職に就くような時代が到来したものの、女性がひとつの職業に従事することに対してはまだ「特殊である」という感覚が残っていたことも否めない事実であった。ただ、大正期に入るとさらに女性就労者が増加したことから、それはもはや社会的に看過できないものとなり、「女性の新しい生き方として認める気運が一方に生れるようになってきた」（村上,1983）。第一次世界大戦後には「職業婦人」と呼ばれるようになる彼女たちは、次に述べるような「モダンガール」の誕生とも非常に関わりが深い存在であった。

(2)モダンガールの誕生と「お洒落」

モダンガール、通称モガとは、大正時代の末から昭和時代の初めにかけて様々な職業に就き、自由を謳歌した近代的な新しいタイプの女性のことである（生田,2012）。その特徴としては、「毛断嬢」と評されることもあったように、断髪のヘアースタイルであること、そして多くは洋装や、キネマやカフェなどの新しい文化を好んだことなどが挙げられる。また、浅井（2016）においては、『机上辞典入りモダン百科事典』（一次資料が入手困難なため、当記述を引用した）の中で「モダン・ガール[流]略してモガといふ。現代娘、近代娘。理性と叡智、四肢の豊かなる発達、進歩的思想、溌剌たる姿が、其の理想とされている。然し洋装断髪の姿だけは如何にも近代的らしいが、教養頭脳の貧弱なのが多いので、自然此の語は、軽薄で気障で、享楽的なオシヤレ女の代名詞」と、批判的な文脈ではあるもののモダンガールの特徴を端的に捉えた文が掲載されていることが指摘されている。ここでは、「オシヤレ」という語がモガの形容に用いられていることに着目したい。

また、一説によると、モガのイメージの形成には、1923 年に起きた、関東大震災が大きな影響を与えていたという。大災害の後、単に東京の街は元の姿を取り戻しただけでなく、「モダン東京」と呼ばれるような、瀟洒で新しい都市へと変化した。そしてそれと呼応するかのように、新しいタイプの女性、すなわちモガがその瀟洒な都市を闊歩するようになったというのである。モダンガールという言葉が「世間で大流行するのは、1926 年(大正 15 年)のこと」（生田,2012）であり、すなわち、その時期は後述するような「洒落」という語の用法における変革期の最中でもあった。当時、その風貌や行動から異端視されることもあり、一方で「オシャレ」と切っても切れない関係を持っていた「モガ」が一世を風靡したという事実は、「洒落」の意味変遷を考察する上でも看過できない事実である。

4.2.用例からの分析

(1)「お洒落」の女性占有化

上述したように、この時代は女性の社会進出の気運が高まりを見せた時期であり、またそれは「お洒落」という語の属性が大きく女性の世界に傾いた時期でもあった。ここでは、

その点について 1914 年に創設された『読売新聞』「婦人ページ」を用いた分析から考察を加えたい。

まず、分析に用いるデータとするため、「洒落」に関する全体の用例の内どの程度が婦人ページに属する記事であったかという統計を取ったところ、1910 年代に 1 例、1920 年代に 2 例、そして 1930 年代に 204 例という結果が見られた。その内、最も数の多い 1930 年代に着目してみると、1930 年代全体の用例の内、約 80%もの用例が婦人ページに属するものであることがわかった。ただ、上述したように、1930 年代には「洒落」という語が含まれる題の短期・長期連載が複数見られることを付け加えておく。とはいえ、連載の内容は当然毎回異なったものであり、そこからは、いかに婦人ページに記載された「洒落」のバリエーションが多様であったかという様相が窺い知れる。

また、「洒落」に関連する記事の内容として女性のファッションや美容に関するものが挙げられるのは言うまでもないが、特筆すべきは男性のお洒落に関する記事ですら婦人ページに包括されていたことである。例えば、16 回完結の連載「モダーンお洒落読本」の第 13〜16 回においては「男性のお洒落はどうあるべきか」という主題の下で論が展開されている。男性のお洒落についてですら婦人ページが包括している意図については定かではないものの、そこからはお洒落に関する分野が一括して女性の管理下にあったという当時の様相が垣間見える。また、それらの記事は「この服が流行している」「こういった着こなしが良い」といった、いわば「積極的お洒落」に属するものというよりは「男性は過度のお洒落を避けるべきであるが、女性の評価を気にするなら最低限これだけはやっておくべきである」という「消極的お洒落」を勧めるものであった。男性の積極的お洒落が批判の対象であることは、「誰の目にもお洒落がつた洒落男などは同性からは、「彼奴、イヤに洒落やがつて、男の面汚しだ！」と嫌はれ、女性からは「まあ気障な男！」と軽く一蹴されてしまひ勝ちなもの」（1936 年 5 月 18 日付『読売新聞』）という一文に集約されている。また、モダンボーイ、すなわちモボの存在に対しても同記事内で「モボてのがヤにお先走りで（中略）飛んでもない不心得者がをる」と批判が加えられている。いずれにせよ、男性のお洒落は「礼儀と清潔さ」に終始し、流行を追うべきでないという内容が見られることが各記事の共通項である。多種多様な内容の「お洒落」に関する記事が婦人ページに数多く見られたことを併せて考察すると、「女性が細かなところまでお洒落に気を遣うことは普通」「男性のお洒落は女性に嫌われない程度で留めるべき」という、「お洒落」の世界における女性中心的な意識がこの頃には既に確立されていたと言える。それは、地女が排除されていた江戸期の様相とは全く異なる、新しい「洒落」の時代の到来を示すものであった。

(2)『お洒落狂女』の影響

今回の調査結果では 1910 年代と 1920 年〜1930 年代の①の用例数の間に大きな落差が見られた。また、1930 年代を通して「お洒落」の名を冠した長期連載が複数存在したことは、

①の用法が当時の主流の用法のひとつであったという証左でもある。その変化が女性の社会的地位の変容を一因とするものであることは既に述べてきた通りであるが、ここではさらに、大衆文学からの影響について考察を加えていく。

具体的には、1924 年に本田美禅著の『お洒落狂女』という大衆小説の広告が掲載された時期を転機として、それ以後①に属する用法が著しく増加している点に着目したい。もちろん、これだけを見て「お洒落」という語の普及に『お洒落狂女』という作品が一役買ったという仮説を立てるのはあまりにも早計である。ただ、詳しくは後述するが、1952 年までに『読売新聞』上でこの語が合計 17 回記事に登場することや、複数回映像化されていることなどを考慮すると、当作品が「洒落」という語の用法に全く影響を与えなかったとは言い切れないと考えた。したがって、以下、『お洒落狂女』が果たして「洒落」の用法の変容に影響を与えるに足るほどの作品であったかどうかについて論じていく。

(イ)本田美禅と『お洒落狂女』

『現代大衆文学全集』続第 16 巻の「自伝」によれば、美禅は 1968 年に信州で生まれ、2 歳の時から東京で育った。『熊本忠愛新聞』の記者を勤めながら 25 歳の年に処女作『折矢柄』を発表し、その後 29 歳で『台湾日々新聞』の編集者となる。38 歳の時には大阪新報社の新脚本募集に採用され、その時から本格的な作家活動を開始した。『お洒落狂女』は彼の代表作であり、出版社である講談社主導の下大々的な商業戦略が打たれた。

図 1：本田美禅『お洒落狂女』の新聞広告
（1925 年 3 月 2 日付『読売新聞』より転載）

(ロ)商業的戦略としての『お洒落狂女』広告とその実態

では具体的には、どういった商業戦略が行われ、その結果はどうだったのだろうか。『講談社の歩んだ 50 年（明治・大正編）』を参照すると、「『お洒落狂女』は大成功でした。とにかく一つの題名で何度も広告する。しかも、ものはおも

しろいというので売れ出した。（中略）こんども宣伝費を惜しまず広告したところ売れ足がついた」という記述があり、確かに当時の広告には、図 1 に見られるようなやや大袈裟とも思える文言が掲載されている。しかし、1925 年の別の広告には、『大阪朝日新聞』、『大阪毎日新聞』、『國民新聞』、『都新聞』など各新聞社からの好意的な評が掲載されており、『お洒落狂女』が実際に好評であったことが伺える。また、『お洒落狂女』は、1926 年、マキノ映画製作所によって映画化され、1938 年にはトーキーがつき、さらに 1952 年には東映がリメイク版を制作している。それに加え、1961 年には原作に脚色を加えた形で、美空ひばり主演の下『ひばりのお洒落狂女』という題で再びリメイクが行われた。長い年月を経て複数回に及ぶ映像化が為されているという点からも、『お洒落狂女』の内容は普遍的に大衆受けするものであったと考えられる。

(ハ)『お洒落狂女』の影響

それでは、『お洒落狂女』はどの程度社会や大衆に浸透していたのか。

1926 年、アメリカ公開の映画『お洒落娘』（原題『Irene』）が日本で公開するという記事が『読売新聞』に掲載された。当作品の邦題は『お洒落狂女』と酷似しているものの、原題は単に主人公である「Irene」の名を取ったものである。管見の限り、『お洒落娘』の邦題に関する詳しい資料がないため断定はできないが、題の構成が酷似していること、『お洒落狂女』と同時期に公開された作品であることを考えると、その影響を全く受けずにこの邦題を冠したとは考え難い。いずれにせよ、『日本映画作品辞典（戦前編）』第一巻を参照しても、『お洒落狂女』は日本の映画の中で「お洒落」の語を用いた初めての作品であり、その後から「お洒落」という語を用いた映画が散見されるようになる。その全てが『お洒落狂女』の影響だとは断言できないものの、映画の顔とも言えるタイトルに初めて「お洒落」という語を用いた点では、洒落の用法を考える上で極めて意義深い作品であると考えられる。また、「お洒落狂女のような姿で～」（1932 年 11 月 14 日付『読売新聞』）、「お洒落狂女だと家人を呼んで引き渡した」（1933 年 3 月 14 日同新聞）という例のように、映画とは全く関係のない事件の記事中において、何の前口上もなく、単なる比喩として「お洒落狂女」の語が用いられている点も興味深い。『読売新聞』の大衆性を考慮に入れると、いかにこの語が庶民の中に定着していたかを窺い知ることができる。

これらのことを総合して考えると、「お洒落」という語を「女性」と結びつけて、なおかつ複数の媒体を用いた形で大衆に発信し、それが受容されたという点では「洒落」という言葉の主流の用法の変遷に『お洒落狂女』という作品がなんらかの関わりを持っていたと考えるのが妥当である。

7.おわりに

本稿においては、美意識「洒落」の輪郭線を捉えるべく、主流の用法の変革期となった

と考えられる 1920〜30 年代を中心に据えて論を進めてきた。変化の背景には、一般の女性の社会的地位の変化があり、それは結果的に前近代の文化を背景とした価値観「洒落」から、遊郭という意識を後景化させることに繋がった。特筆すべきは、男性と遊女を中心とした享楽的世界であった「洒落」の世界から排除されていた一般の女性たちが、明治以降その世界に回帰しただけではなく「お洒落」という語をほぼ占有することとなった点である。また、「お洒落」という語のイメージ形成には、大衆文学『お洒落狂女』からの影響が考えられるという点についても示唆した。

今後の課題としては、美意識「洒落」をさらに立体的に捉えるべく、対象とする時代の範囲をさらに拡大し、現代における「洒落」についても仔細に考察を加えていきたい。その際には、「男性性」や「女性性」など、どの「属性」がいつの時代に、どういった要因で付加されたのかということについても検討する。また、本稿の対象範囲となった明治〜昭和期についても、他のコーパスや文献を用いて、データの信頼性や精度を高めていきたいと考える。

参考文献・URL

浅井カヨ（2016）『モダンガールのスヽメ』原書房
生田誠（2012）『モダンガール大図鑑－大正・昭和のおしゃれ女子』河出書房新社
興津要（1983）『新聞雑誌発生事情』角川書店
金谷治(1975)「藤原惺窩の儒学思想」,石田一良他校注『藤原惺窩　林羅山』,岩波書店
鎌谷正他編（1992）『大漢語林』大修館書店
斎藤良輔（1989）『しゃれの文化史－言語遊戯アナリシス－』未来社
社史編纂委員会編（1959）『講談社の歩んだ 50 年（明治・大正編）』講談社
出久根達郎（2003）『昔をたずねて今を知る－読売新聞で読む明治』中央公論新社
日本映画史研究会編（1996）『日本映画作品辞典（戦前編）』1, 科学書院 , 霞ケ関出版
檜谷昭彦（1965）「遊女と地おんな－近世文学の女性観」,『藝文研究』19, 慶應義塾大學藝文學會
本田美禅（1931）『現代大衆文学全集　続第 16 巻』平凡社
水野稔（1975）『黄表紙・洒落本の世界』岩波書店
吉田金彦編（2000）『語源辞典（形容詞編）』東京堂出版
茂木光春（2013）「始まりの人　藤原惺窩（上）」,『扣之帳』42, 扣之帳刊行会
村上信彦（1983）『大正期の職業婦人』ドメス出版
脇田晴子他編（1995）『日本女性史』吉川弘文館
ヨミダス歴史館,< http://www.yomiuri.co.jp/database/rekishikan/>2016 年 9 月 22 日アクセス
Japan Knowledge, <http://japanknowledge.com/>2016 年 9 月 22 日アクセス